

亜矢 令和3年12月度特別作品

松江の一日

亜矢

十月、リサイタル鑑賞のため、松江へ行きました。移動時間の方が、松江にいた時間より長かったのですが、素晴らしい演奏に、貴重な日となりました。尚、ここでいうオルガンは、パイプオルガンのことです。

低き山にたく短き秋の虹

湖沿ひをバスの走りにて天高し

新蕎麦を駅の小さな店で食ふ

オルガンとピアノ行き来の秋日かな

十月や歌手の巻き毛のよく揺れて

オルガンのホールに響く爽やかな

ソプラノのアヴェ・マリア聞く秋の星

純白の歌手のドレスや冬近し

宍道湖の波たつてゐる秋の暮

秋時雨土産を抱へバスに乗る

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

亜矢さんは、これまでオペラをテーマとする作品など、日頃から音楽の句を多く作っておられます。今回もリサイタルを中心に、その前後の小さな旅を素直に自然体で詠まれています。日常生活を十七文字にする、と言う作者の秋の一日を楽しめる作品です。

オルガンのホールに響く爽やかな

よく音の響ホールのオルガンの音が満ちていきます。爽やかな秋の風が吹きわたるようです。

ソプラノのアヴェ・マリア聞く秋の星

人の歌を間近に聞くと心が震えます。特にアヴェ・マリアは、どの作曲家の歌も深く心に届くのです。目を瞑って聞いていると、澄んだ秋の星の瞬きを感じたのです。

純白の歌手のドレスや冬近し

ソプラノ歌手の美しい巻き毛、白いドレス。雪がひらひらと舞っては消えてゆく。雪の女王を思いました。

美耶 令和3年12月度特別作品

秋の広島城を訪ねて

美耶

「菊の祭典」広島城大菊花展」。新聞の見出しを見て、亡き父も毎年、大輪の菊を咲かせ楽しんでくれた事を思い、どんな菊に出会えるのかなど、楽しみに広島城へ出掛けました。城内の紅葉も見事ながら、秋晴の休日と重なり、護国神社では七五三のかわいい姿にも出会い、過ぎし日々を思い出しながらの秋の一日でした。

二の丸の先の城内さやかなり

石垣に沿うて吹く風秋深し

城内に香の漂ひて菊花展

聞こえ来る常連の声菊花展

菊を見て砂利を踏む音昼日中

秋晴の濠に城壁映りをり

外濠に映りて動く鱗雲

秋麗の鯉のゆつくり泳ぎをり

紅葉のひと景の鯉へ流れけり

一束の菊を求めて帰りたり

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

美耶さんは、日頃とても繊細な花の匂を作られる方です。今回の特別作品は、菊花展の聞かれる広島城の秋を詠んでおられます。どこから入られて、どのように回られたのかと想像しながら、一緒に広島城を歩いているように感じる作品となりました。

石垣に沿うて吹く風秋深し

風は、石垣に沿って歩く作者に吹いています。その風が少し寒さを感じさせたのでしょうか、「秋深し」という季語でその微妙な温度が伝わってきます。

菊を見て砂利を踏む音昼日中

菊を見ていると、ただ砂利を踏む音だけが聞こえてきます。「菊」という季語と自分の足音だけを詠むことで、菊の香りに包まれて、その香りの只中に居る作者を感じました。

一束の菊を求めて帰りたり

お父様が大きな輪の菊を作っておられたことを思いながら、菊を買われたのでしょうか。お父様との思い出の中の菊と買い求めた菊を重ねながら、家路につくのです。